

# 英語コース大学院生への日本語教育

## 理系修士の留学生が日本企業のインターンシップに参加するには

袴田麻里(静岡大学国際交流センター)

hakamata.mari@shizuoka.ac.jp

### 【要約】

初級修了程度の日本語能力を持つ留学生を対象に、企業説明とインターンシップ申込みを兼ねた企業との交流会において、自己紹介プレゼンテーションを行い、個別に質問をする機会を設けた。交流会に先立ち、作文・話し方の授業において、自己紹介練習や、日本企業の留学生採用動向をまとめた。受講者は学んだことを実践する機会を得たが、研究活動と並行して日本語学習を継続するには困難があることが分かった。

### 1. 留学生受入れと英語コース設置

世界的に留学生が増加し、学ぶ場所が流動化している。日本国内に目を向ければ、少子高齢化が急速に進み、経済の活性化が危ぶまれている中、2008年に留学生受入れ30万人計画が発表された。留学生10万人計画でうたっていた「途上国支援」「日本との架け橋」は残しつつ、高度人材受入れと連携させながら、国・地域・分野などに留意し、優秀な留学生を戦略的に獲得していくことを表明した。ビザの緩和、就職の拡大などによって、日本定着を促していくという具体的な方策まで明確に打ち出され、文部科学省だけでなく、法務省や経済産業省、厚生労働省など関係省庁が連携して優秀な留学生の獲得と日本社会への定着促進に取り組む。留学生を引きつける魅力ある大学づくりの方策として、英語のみによるコースの設置が推奨され、国際化拠点整備事業（グローバル30）、スーパーグローバル大学等事業（スーパーグローバル大学創成支援）採択校を中心に、学士課程、修士課程において英語で学べる課程の設置が促された。

留学生30万人計画が留学生10万人計画と大きく異なるのは、留学生の誘致だけでなく出口（卒業後の進路）までの整備に言及していることである。10万人計画が達成された2000年代は、留学生の卒業後の進路の選択肢は限られていた可能性はあるが、少子高齢化に伴う労働人口の減少により産業競争力の低下が懸念されるようになってから、日本の大学に在籍している外国人留学生の日本企業への積極的な採用が促されるようになった。

### 2. 静岡大学の英語コース

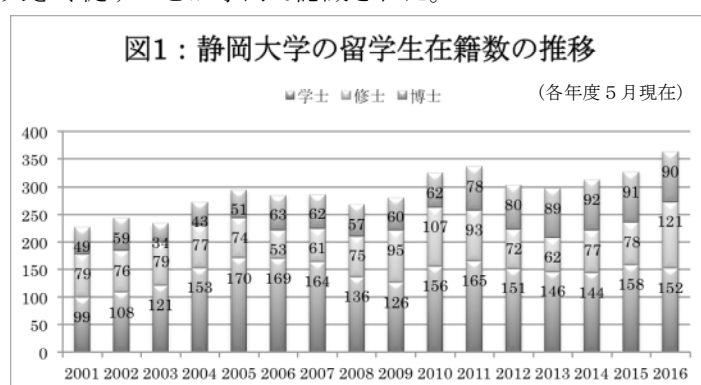
#### 2.1 コースの概要と在籍する留学生数

静岡大学では、電子科学研究科(1976 設置)と理工学研究科後期課程(1996 設置)が2006年に統合、「創造科学技術大学院自然科学系教育部(GSST)」が設置され、英語で学位が取得できるようになっている。GSST発足以降、英語で勉学・研究ができ、またダブルディグリープログラムなど制度の整備も進めた結果、協定校を中心に博士課程において留学生受入れが本格化した。

修士課程では、2015年に工学研究科(1964 設置)、農学研究科(1970 設置)、理学研究科(1976 設置)、

情報学研究科(2000 設置)を改編統合し、「総合科学技術研究科」を発足させたことを機に、英語のみで学位が取得できる 10 月入学のコースを設置し、留学生の在籍数増加を図った。特にアジア諸国出身者には入学料と 1 年間の授業料を不徴収とする特典を付け、アジア各地で事業展開する日本企業でリーダーシップを発揮できる人材、また研究開発をリードできる人材を育成することを目的に掲げた(アジアブリッジプログラム(ABP))。その結果、英語コースに在籍する留学生は ABP 生を中心に大きく増加し、開設前の 2015 年 5 月に 78 名だった修士課程に在籍する留学生は、2016 年 5 月には 121 名となった(図 1)。

このように、留学生を海外から直接受入れる制度の発足によって、英語による教育が可能であれば留学生受入れを大きく促すことが学内で認識された。



## 2. 2 修士課程英語コース在籍留学生の属性と進路希望

2.1. で述べたとおり、静岡大学では 2015 年度から修士、博士の両課程において日本語不問で留学生を受入れられる体制となった。しかし、留学生が日本で就職を希望する場合、日本語能力が重視される(海外技術者研修所(2007))。高度外国人人材の需要が高いとはいえ、英語コースの ABP 生も日本国内での就職には困難が伴うと予測された。

そのため、静岡大学がどのような支援をする必要があるかを見極めることを目的に、国際交流センターが ABP 生の進路希望調査を実施した。調査は、総合科学技術研究科へ英語コース入試によって入学した留学生 49 名(表 1)を対象に、2016 年 1 月から 3 月にかけてオンラインでのアンケート(日英併記)を実施し、46 名から回答を得た(回答率 94%)。

表 1：修士英語コース入学者(2015 年度)

専攻	情報		理学		工学		農学		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
インドネシア	1	1	2	0	4	2	2	3	9	6
インド	0	0	0	0	5	0	0	0	5	0
バングラデシュ	0	0	3	2	3	2	1	0	7	4
スリランカ	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
タイ	1	0	0	0	0	2	2	2	3	4
ベトナム	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
中国	0	0	0	0	3	0	0	0	3	0

トルコ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
イギリス	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ネパール	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0
合計	2	4	5	2	17	9	5	5	29	20

以下は調査結果の概要である。

<p>1. 日本語力（自己評価）：初級76%、中級22%、上級2%          入学前の日本語学習歴あり：59%（27人）          うち日本で8人、母国で19人</p> <p>2. 平均的なキャンパスで過ごす時間：平均10.3時間（最長14時間、最短5.5時間）          うち研究室で過ごす時間：平均7.3時間（最長14時間、最短1時間）</p> <p>3. 進路希望：博士課程等への進学 56%（25人）          日本で日本企業就職 40%（18人）</p> <p>4. インターンシップ希望：希望する 71%（32人）          どちらでもよい 22%（10人）          希望しない7%（3人）</p>
--

日本語能力を自己評価で上級とした回答者は2%（1名）、中級は22%（11人）、初級は76%（37人）であった。入学時（2015年10月）の日本語コースプレイメントテストにおける評価は、N1以上が1名、N3～N4程度が8名、40名は日本語未習からN5程度であった。つまり、ある程度の日本語能力を有する学生もいるが、多くは日本語能力が非常に低いと言える。

また注目すべきは、日本での就職希望者が40%、インターンシップ希望者が71%とかなりの数に上っていることである。半数の留学生は母国へ戻ることも考えているが、機会があるなら母国以外で進路を見つけたいと考えていることがうかがえる。母国へ戻る場合も、インターンシップや日本での就職の経験が、大きなアドバンテージとなることは言うまでもない。2016年2月に行われた、研究科長との意見交換会で真っ先に質問に上がったのは「インターンシップにはどうやって参加するのか」だった。

## 2. 3 インターンシップ参加の機会

### 2. 3. 1 研究科共通科目「大学院インターンシップ」（1単位、1・2年次）

総合科学技術研究科では、以下の通り研究科共通科目として「大学院インターンシップ」（1単位、1・2年次）を提供している。日本人学生の多くは、学士課程でインターンシップを経験しているが、修士課程でもインターンシップに参加する学生は多い。

①5月～6月 全学インターンシップガイダンスに出席

（インターンシップの意義、実習目標の立て方、応募書類の書き方、必要なマナー）

②実習先決定後（実習先は学生自身が決定）、単位認定希望申告書を提出し、保険に加入、実習

録等関係書類を受領

③8月～9月 インターンシップ実施（※5日以上の実習でない場合、単位認定されない）

④2月頃 単位認定

## 2. 3. 2 インターンシップ説明会

「大学院インターンシップ」はすべての修士課程在籍者を対象としているが、履修案内、学内周知、ガイダンスが日本語で行われるため、日本語不問で受入れた留学生には履修が困難であった。国際交流センターの調査により英語コース在籍の留学生にインターンシップ参加希望者が多いことが明らかになったため、研究科が「大学院インターンシップ」のインターンシップガイダンスとは別に、同じ内容で英語によるインターンシップ説明会を2016年6月28日に実施した。同日には、静岡県西部地区の5社が英語で企業説明し、インターンシップの募集も行われた。

その結果、(1)インターンシップの意義、実習目標の立て方、応募書類、必要なマナーについて英語で講義すること、(2)企業からの会社概要説明と個別相談を英語で行うこと、(3)保険加入の手続きは可能であることが分かったが、(4)学内書類が英語化されておらず、留学生が単位認定の手続きをすることが著しく困難であることが分かった。また、(5)企業との連携においても検討が必要である。工学部と情報学部のインターンシップ担当の教員が企業を訪問し説明会への参加を募ったが、日本語ができないのでは受入れられない、インターンシップは受入れたいが日本語能力が低い場合何をどうするか考えていないという企業が多かった。参加してくださった5社も、単位取得に必要な5日以上の実習は1社で、1日のみが3社、2日間は1社であった。

## 3. インターンシップ参加を前提とした日本語クラスの試行

### 3. 1 日本語学習機会

国際交流センターのアンケート調査の結果とインターンシップ説明会実施により、研究科において日本での就職、あるいはインターンシップには日本語能力の向上が欠かせないことが認識された。現在、該当する留学生に国際交流センターが提供している日本語教育は、表2のとおりである。研究科の正規科目ではなく補講的な扱いの科目である。

表2：日本語コースについて

	日本語研修コース	日本語教育プログラム
開講キャンパス	静岡キャンパス、浜松キャンパス	静岡キャンパス、浜松キャンパス
レベル	初級(静岡)、中級(浜松)	入門(日本語1)、初級(日本語2)、中級(日本語3)
授業数	15回×15週	3回×15週
成績	・80%以上出席し所定の試験を受験 ・S「秀(90～100点)」、A「優(80～89点)」、B「良(70～79点)」、 C「可(60～69点)」及びD「不可(59点以下)」 ・出席が足りない場合、成績はD	

### 3. 2 クラスの概要（日本語3-c）

日本語能力は低いインターンシップの希望を持つ留学生は多い。また日本語能力だけでなく、日本企業についての基本知識や就職活動に対する理解不足も、留学生の日本での就職を妨げる要因であ

る（留学生支援ネットワーク(2015)）。そこで、2016 年前期に、初級修了程度の日本語能力を持つ留学生を対象に、中級の日本語知識・技能の習得に加えて、大学外の人、初対面の人と円滑にコミュニケーションできるようになることを目的とした、作文・話し方の授業を行った。授業時間は90分1コマで15週間、学習内容は、自己紹介・性格の言葉を学ぶ、奨学金応募書類を読む・書く、Eメールを書く、資料をもとに日本企業の留学生採用を考える、などである。コース最終日には、企業説明会とインターンシップ申込みを兼ねた企業との交流会において、企業の人事担当者に自己紹介プレゼンテーションを行い、個別に質問をする機会を設けた。

受講者は9名であった。内訳は、修士1年生7名、研究生1名、博士3年生1名である。修士生のうち3名は修了したが、その他の受講者は出席数が足りず修了できなかった。

### 3. 3 企業との交流会

静岡県は自治体としても留学生の就職支援に力を入れている県である。県庁大学課が留学生誘致、留学生の就職支援を担当して、毎年留学生対象の企業交流会や就職支援講座などさまざまな取り組みが行われてきたが、2014年にふじのくに地域・大学コンソーシアムが設立され（2015年に公益社団法人化）、さらに活発な支援活動を展開している。企業と留学生との交流会は、企業にとっては、企業情報の提供はもちろん、留学生の属性を知り、日本語能力を把握する機会となる。同時に留学生にとっては、地元企業を知り、就職・インターンシップ先として検討する材料を得る機会となる。2016年度は、これらの取り組みを、日本語3-cの最終日に重ねた。静岡大学の参加留学生46名のうち、修士生6名、博士生1名が日本語3-cの最終課題として、自己紹介プレゼンテーションを行った。

表3：企業との交流会の概要

日時	2016年7月25日（月）午後		
場所	静岡大学浜松キャンパス「佐鳴ホール」		
主催	公益財団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム	静岡大学国際交流センター	
実施	静岡県国際経済振興会(SIBA)	静岡県国際交流協会(SIR)	
企画	「グローバル人材&静岡県企業交流会2016」(浜松会場)	「平成28年度留学生就職支援講座」プレ講座	日本語3-c「作文・話し方」最終発表会
参加	企業：17社（製造業、IT、不動産など） 留学生：静岡大学生46名（修士生30名、博士生16名） 他大学生9名		

参加留学生に対するアンケートからは、会社の人と話せた、英語でいろいろ聞けた、インターンシップができる、日本語で話せなかった、もっと日本語を勉強しなければならないなど、企業と交流したことで何らかの気づきを得たことが分かった。

静岡県国際経済振興会が、浜松会場の17社と静岡会場の12社へ留学生に求める日本語力を調査したところ、日常会話程度が10社、日本語能力試験N3以上が2社、N2以上が7社、N1が3社であり、少なくとも中級以上の日本語能力は必要であることは明らかであった（回答なしは7社）。

### 3. 4 日本語3-cを終えて

補講的な性格を持つ日本語教育プログラムにおいて、就職やインターンシップを意識した学習内容

は、今回が初めての試みであった。良かった点として、奨学金申請や就職事情などの課題に受講者が関心を持って取り組めたこと、最後に企業の人事担当者と話す機会を設けたことにより、学んだことを実践できたことが挙げられる。発表した受講者は、「私の発表は長過ぎた」「私の発表は下手だった」など他の受講者と比較して否定的な自己評価していたが、企業の人事担当者から様々な質問を受け、それに答えたことで自信も持ったと思われる。改善が必要な点としては、出席が足りず修了できなかった受講者が多かったこと、出席が安定しないため宿題や課題を完成させられないこと、初級の学習項目が不完全な受講者には、未習語彙が多すぎて授業についていけなかったこと、最後の発表をどうしてもしたくないという受講者がいたこと、などである。

#### 4. まとめと今後の課題

今回、交流会に参加した企業の回答から中級程度の日本語能力が求められていることが分かった。英語コース入学者であっても、日本で就職やインターンシップを希望するのであれば、日本語でのコミュニケーション力は必須ということである。日常会話ができて、読み書きができない場合、内定率が変わることも報告されている（廣瀬・植田（2011））。

しかしながら、修士課程での勉学と平行しての日本語習得は極めて難しい。国際交流センターの調査では、平均して7時間もの間、研究室で過ごしていることが分かっている。2年という限られた時間で、研究活動と卒業後の進路の準備を行うには、渡日前の日本語学習やe-learning、長期休暇中の集中コースなど、これまでとは異なる教育形態を検討する必要がある。第1学期の日本語科目の履修率の高さから、留学生は日本語学習の重要性を認識していることがうかがえるが、その動機を持続させる工夫も必要である。今回、日本語3-cの最終発表日に、受講者ではない同級・同国の留学生が多く聴衆として参加したことで、参加留学生が例年になく多かった。彼らの中には、留学生のプレゼンテーションを見て「日本語の発表がすばらしかった」などの感想を持った学生もいた。このような機会が日本語学習の動機づけとして機能するよう、今後工夫していきたい。

同時に、英語でインターンシップを受入れる企業の開拓も必要だろう。そのためには、企業が留学生の属性や日本語力を把握し、どのような形でなら受入れが可能かを検討していただかなければならない。企業の社員研修の一環としての受入れなど、これまでとは異なる形態の提案も積極的に大学から行っていく必要があるだろう。

#### 【参考文献】

海外技術者研修協会(2007)『日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究報告書』

[http://www.aots.or.jp/jp/press/pdf/press070514\\_2.pdf](http://www.aots.or.jp/jp/press/pdf/press070514_2.pdf)

一般社団法人留学生支援ネットワーク(2015)「外国人留学生の就職活動の現状と教育機関に求められる支援」平成27年度全国キャリア・就職ガイダンス(外国人留学生のキャリア教育・就職支援についてのセッション)配布資料

廣瀬幸夫・植田和美(2011)「理系留学生の内定状況と内定を得にくい留学生のための支援方法」『留学生教育』第16号、留学生教育学会、pp.47-56